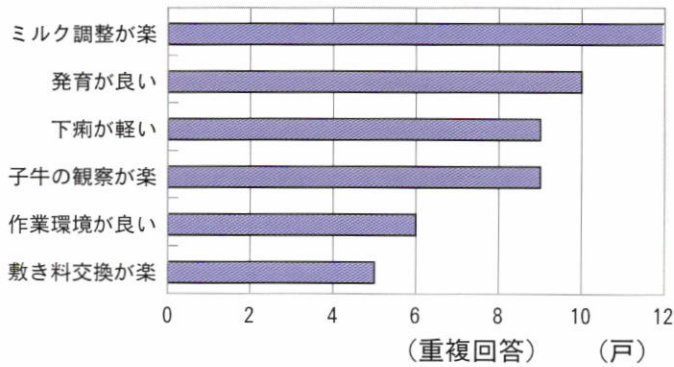


自動ほ乳システムのメリット

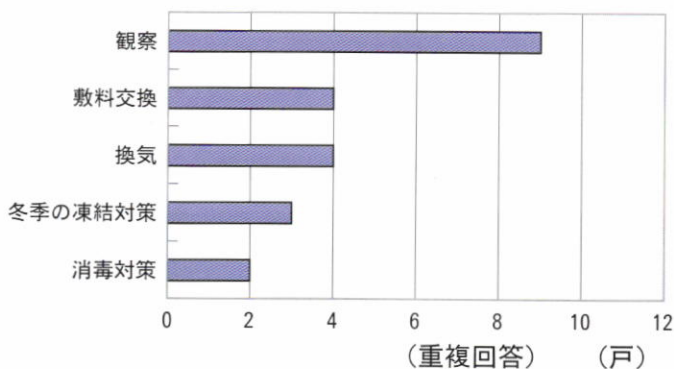


導入前との比較では、省力化だけではなく発育が良いなど、導入して良かったとの回答が大半でした。

導入により、ほ乳量、濃度、回数、添加剤などコンピュータで設定どおりの個体管理ができるため、発育が良くなったと考えられます。

また、カーフハッチに比較すると個体観察がしやすいため、疾病の見落としが少なくなり、早期治療が可能となっています。

導入後、特に注意を払っていること



導入後、特に注意していることは意識的な観察、事故を未然に防ぐという回答が多くありました。カーフハッチに比較して、除糞や敷き料交換などをこまめに行えるようになり、良好な環境が得られやすくなっています。

一方、群管理は、病気が蔓延しやすい条件にあるので、清潔な環境と、きめこまかな管理が不可欠です。

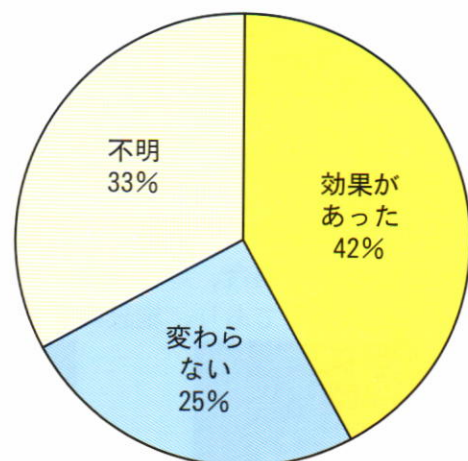
経済的にみると

経済的にみると、「効果があった」が最も多く、その要因として、育成の発育の向上や省力化により増頭できた、個体販売価格が高くなったなどの声がありました。

経済的に悪くなったという回答はありませんでしたが、ミルク代や電気料、暖房料など維持経費は増えています。

また、導入後間もないので不明との回答も多く、変わらないとの回答も25%ありました。

今後、良好な発育により、育成期間の短縮や個体能力の向上など経営全体に反映することが期待できます。



まとめ

自動ほ乳システムは「導入や維持に経費がかかる」、「飼育方式が群飼いのため、下痢や風邪といった疾病が蔓延しやすいのでは」の他に、「ほ乳量や回数」「畜舎構造やレイアウト」「搾乳後継牛として人とのコミュニケーション不足のへい害」など未解明な部分もあります。

今回の調査結果では、自動ほ乳システムを導入して良かったという回答が多くありましたが、自動ほ乳システム導入に当たっては、技術課題や経済的な効果を十分検討して取り組むことが必要です。

飼料給与の効率化

乳牛飼養頭数の増加により、飼料給与作業は重労働で時間もかかるものになってきています。特に既存の繋ぎ牛舎では、粗飼料の給与は人力で行うことが多く、大きな負担になっているのが現状です。この項では、飼料給与を効率的におこなっている事例などを紹介します。

管内の現状

根室管内の多く農場は繋ぎ牛舎で、さらにその大半は対尻式となっています。多くの牛舎は飼槽前通路が狭く、人力または一輪車等で粗飼料や配合飼料の運搬・給与が行われています。

フリーストール牛舎や最近建てられている繋ぎ牛舎は、機械による飼料給与を考慮して設計・建設されてきています。また、既存の繋ぎ牛舎を改造して機械を導入している事例も増えてきています。

自走給餌車

飼槽前通路が自走給餌車の車幅以上広ければ、導入することが可能です。ただし、曲がり角では、それ以上のスペースが必要です。

きざまれた粗飼料やTMR(別にTMRを調整するための機械が必要)を積載し、給与します。



自走給餌車 (約200万円)
〔車幅 115cm
8馬力ガソリンエンジン〕



TMRミキサー
〔 8 m³
約600万円 〕



リフト
〔 5 m
約50万円 〕

自動給餌機

最近、繋ぎ牛舎での多頭化や労働軽減のため、自動給餌機の導入が増えてきています。個体管理を重視する場合、このシステムは有効です。導入に当たっては機械自体をつり下げるレールの設置が必要であり、施設の補強を要することがあります。



配合飼料自動給餌機
(約250~300万円)



自動給餌機導入の際のレール
と施設の補強
(レール：約1万円/m)



配合飼料+粗飼料自動給餌機
(約1,000~1,200万円)